榎垣外・志平・清水田
遺跡発掘調査報告書
（概　報）

昭和63年度 榎垣外遺跡ほか分布調査報告書

１９８９年

長野県岡谷市教育委員会

比較文化論研究室

序

昭和63年度の榎垣外遺跡ほか、試掘、確認調査（詳細分布調査）及び緊急発掘調査の報告書（概報）を刊行することになりました。

岡谷市内には170ヶ所をこえる遺跡が知られていますが、近年の開発、とくに住宅建設に関連する土木工事は急増して、本年も24件の調査件数にのぼり、貴重な埋蔵文化財が発見されました。

このような成果を見るたびに、長い歴史と文化の重みをあらためて認識するとともに、貴重なこれら文化遺産を大切にして、岡谷の歴史と文化を明らかにし、地域の創造に役立てていかなくてはいけないことを強く感じているところです。

今年度の調査にあたり、土地所有者各位、工事関係者の方々、そして、調査地に隣接した多くのみなさんのご好意、ご協力に御礼申し上げる次第であります。また、発掘に携わっていただいたみなさんには、炎暑、厳寒の中を御苦労いただき感謝いたしております。

おわりに、出土品の鑑定や保存処理にご助言や貴重なご意見、ご教示を賜りました奈良国立埋蔵文化財研究所、奈良飛鳥資料館、文化庁の先生方、県文化課の先生方をはじめ、お世話になった関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成元年３月20日

岡谷市教育委員会

教育長　八幡栄一

例　言

1．本報告書は、昭和63年度、榎垣外遺跡ほか分布調査（試掘、確認調査）及び緊急発掘調査の報告書（概報）である。

2．調査は、国庫および県費から補助金交付をうけた岡谷市教育委員会が、昭和63年４月18日から平成元年３月20日にかけて実施した。整理作業は主に12月～１月に行ったが、出土品は十分な整理が終了していないため、概要の掲載にとどめてある。

3．出土品のうち、榎垣外遺跡柿垣外地籍出土の青銅鏡、鉄製海老錠、灰釉陶器、同遺跡金山東地籍の墨書土器については、奈良国立埋蔵文化財研究所工楽善通、肥塚隆保、上原真人、巽淳一郎、寺崎保広、鬼頭清明の各先生方ならびに奈良飛鳥資料館杉山洋先生にご教示いただいた。

4．出土遺物、記録図面、写真等の資料はすべて岡谷市教育委員会で保管している。

目次

序
例言・目次
1．63年度調査の概要……1
2．志平遺跡……3
3．榎垣外遺跡（柿垣外地籍）……4
4．同上（上の原地籍）……7
5．同上（金山東地籍）……9
6．同上（山道端地籍）……11
7．清水田遺跡……14

1．63年度試掘・確認調査（詳細分布調査）及び緊急発掘調査の概要

63年度、岡谷市内において周知の遺跡に農地転用、公共事業等の開発行為が計画・実行され、市教育委員会が何んらかの対応を行った件数は30件をこえ、そのうち、試掘、確認調査は24件に及んでいる。そして、それからさらに緊急発掘したケースは７件、４遺跡である。(ただし２件は緊急発掘に際して、調査費用の協力を得ている)

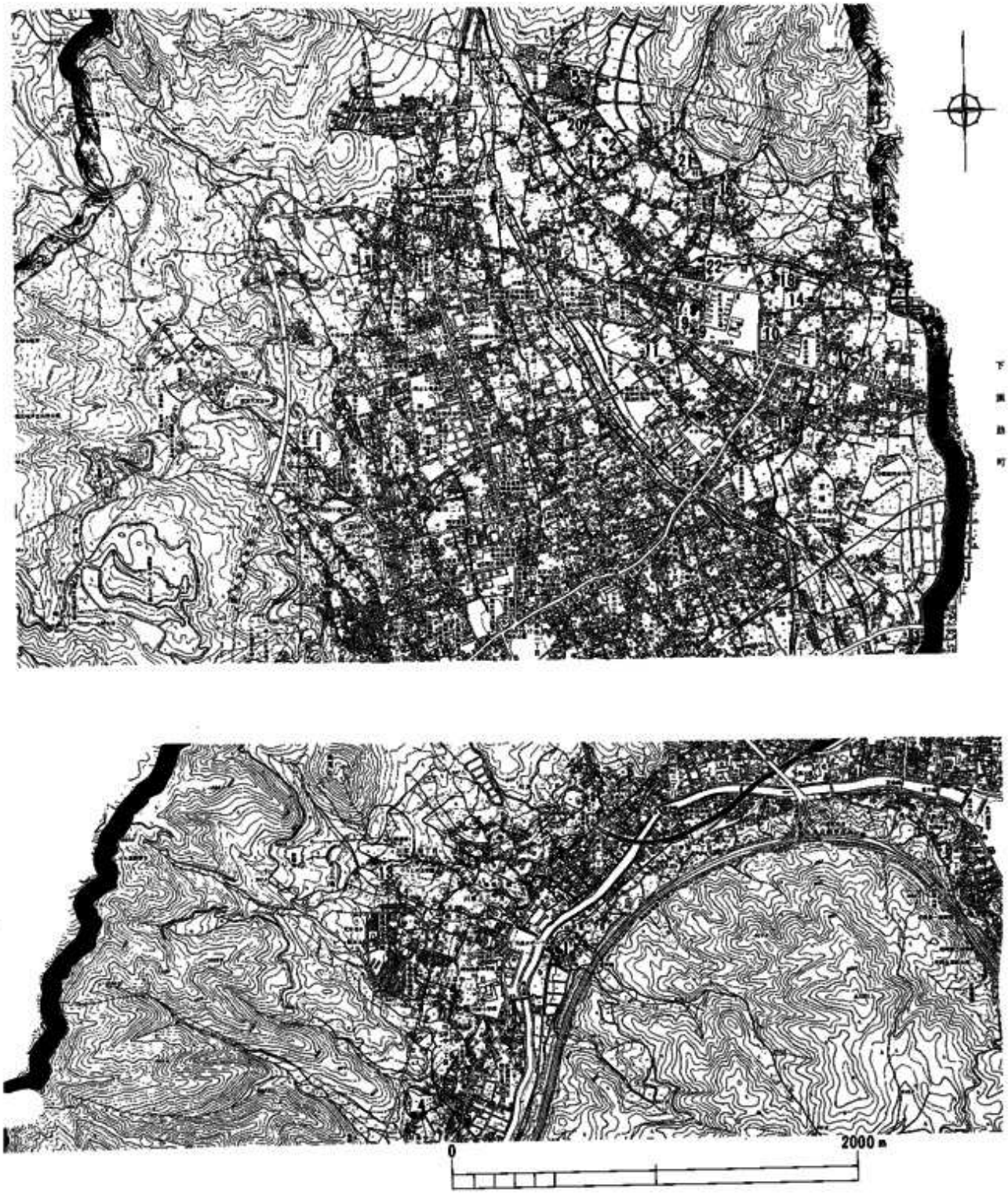
本年度の調査の特長は、前年度に引き続き長地方面（湖北地区沖積地）の平坦部に調査が集中していることである。そのために、縄文時代の遺構・遺物は志平、清水田、広畑の各遺跡で発掘されたものの、その数量はこれまでになく少ない数であり、代って奈良～平安時代の遺構・遺物が極立って多い結果となった。

調査の中で特に注目すべきものは、榎垣外遺跡の成果であろう。官衙跡を北東端にして２km四方に及ぶ範囲内に、大きく三地点の住居群が明らかにされつつあったが、今年度、思いもせず最西端の柿垣外地籍において、火災焼失家屋が発見され、青銅鏡二面を含む炭化米等多量の遺物が検出された。この地籍は横河川自然堤防の縁にあって、地下は大きな転石が河原のごとく堆積した場所であって、あまり遺構の存在は期待されていなかった地区である。同じく西北端の上の原地籍においても、２棟の平安時代住居跡が検出されるなど、住居群（ムラ）の広がりは予想以上に複雑・広範囲であることが明らかとなり、詳細分布調査の重要性を示す結果となった。

なお、緊急発掘については以下本文中に概要を記したが、広畑遺跡とその他試掘・確認については特別の成果もなく下記の表によって詳細は省略した。また、一部費用の協力を得た榎垣外遺跡上の原、金山東地籍の概要については一所にまとめて本書に掲載した。

表１　63年度試掘・確認調査一覧表

	遺跡名	所在地	調査の原因	調査期間	主な遺構	遺構・遺物の時代他	
1	志平	川岸東２丁目9886—4	住宅建設	4.18～ 5. 8	住２、壙８	縄文,平安,	緊急発掘
2	上屋敷	長地横川5265—8他	〃	4.19～ 4.20	壙２	縄文,	
3	榎垣外(柿垣外地籍)	長地東堀2291—2	〃	4.21～ 8. 9	住１、壙１	平安,鏡２,	緊急発掘
4	西垣外	川岸３丁目3258—3	〃	4.21～ 4.22		縄文,	
5	横川上ノ原	長地横川5844—10	〃	5.13～ 5.14		縄文,	
6	目切	長地中屋3820—1他	〃	5.19～ 5.26		縄文,	
7	榎垣外(上の原地籍)	長地東堀2803—2	駐車場建設	5.14～ 6. 8	住２	平安,	緊急発掘
8	榎垣外(上の原地籍)	長地東堀2803—6	〃	5.27		縄文	
9	榎垣外(上の原地籍)	長地東堀2793	住宅建設	6.4			
10	榎垣外(金山東地籍)	長地中屋2883—2	工場建設	6. 7～ 7. 4	住５	平安,	緊急発掘
11	榎垣外(山道端地籍)	長地東堀2349—1他	住宅建設	6.28～ 9.30	住７	平安	緊急発掘
12	上屋敷	長地横川5214—3	作業道設置	6.29～ 7. 1		縄文	
13	広畑	川岸上４丁目1612—1	住宅建設	7. 7～ 7.26	住１	縄文	緊急発掘
14	榎垣外(榎海戸地籍)	長地中屋4023—1	駐車場建設				
15	榎垣外(中町地籍)	長地東堀3514	住宅建設	9.13			
16	清水田	長地中村4303—1他	〃	9.28～11. 1	住７、壙３	縄文,平安,	緊急発掘
17	榎垣外(小田野沙下地籍)	長地　3164—1他	駐車場建設	11. 8～ 1.31			
18	榎垣外(古屋敷)	長地中屋4076—8	〃	11. 8～ 1.31	住２	平安,	
19	榎垣外(上の原)	長地東堀2802	〃	11. 8～ 1.31		平安,	
20	上屋敷	長地横川5534—1他	資材置場	12.19～ 1.31			
21	梨久保	長地中村45588—15	住宅建設	12.19～ 1.31		縄文,	
22	榎垣外(向田地籍)	長地中村4714—1他	公会堂建設	1.17～ 2. 2	住１	平安,	

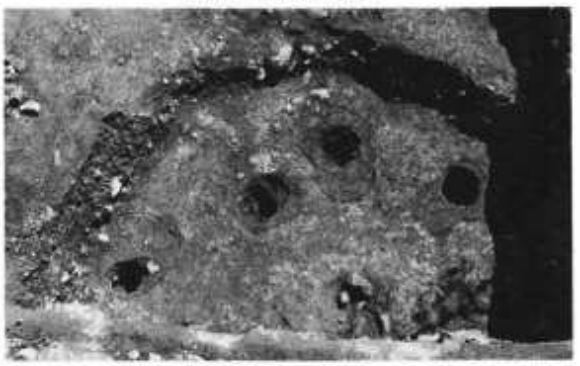


第1図　試掘・確認調査地点（番号は表1の一覧表に同じ）

2．志平遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市川岸東２丁目9886―4
2．土地の所有者　林　昌明
3．発掘調査の期間　昭和63年４月18日～63年５月８日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　８９．2㎡
6．発見された遺構　縄文時代住居跡　１棟
縄文時代小竪穴　８基
平安時代住居跡　１棟

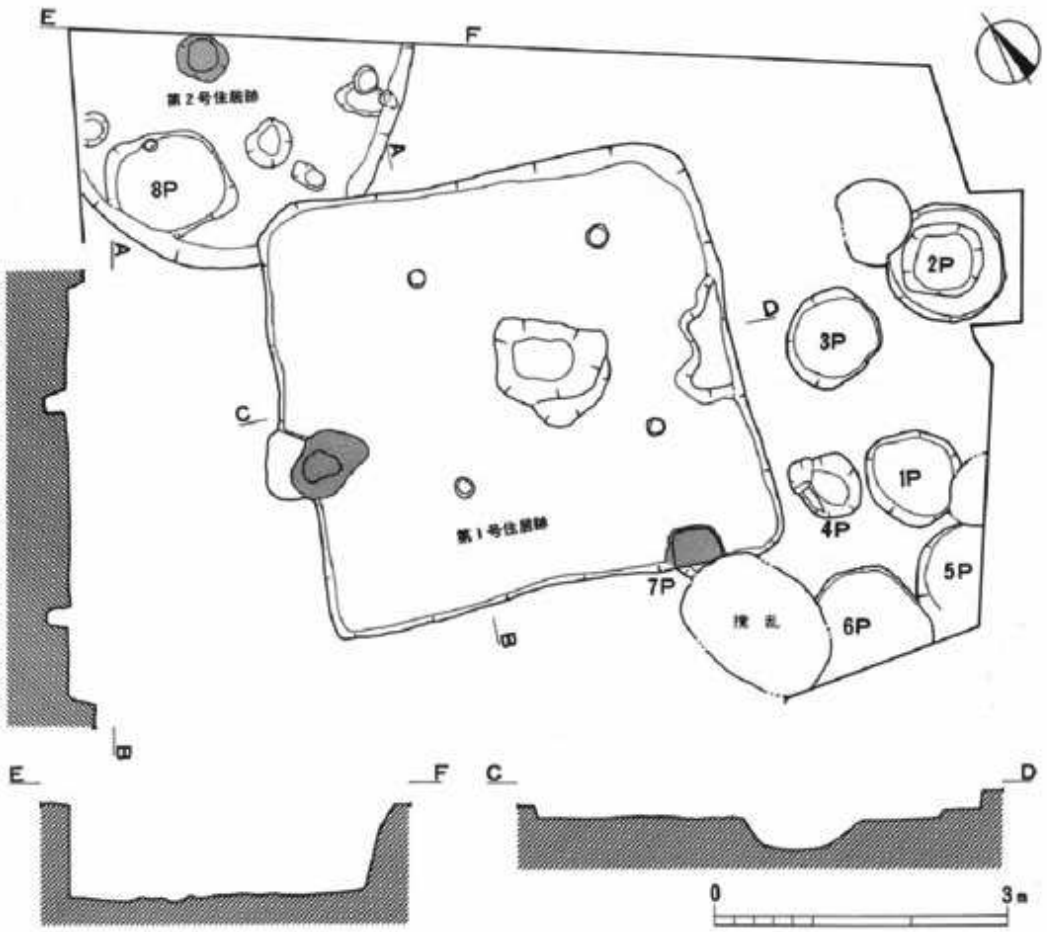
第２図　第１号住居跡


第３図　第２号住居跡

第１号住居跡は、平安時代後半の住居跡で、大きさは4.7×4.5m、西側にカマドを持つ住居跡である。床に堅いタタキ面があり中央部に約１m四方の凹みがある。

第２号住居跡は、縄文時代中期中葉の住居跡で、その3/4は調査区外にある。大きさは短径４mほどの楕円形と思われる。炉は土器片を８枚使った土器囲い炉である。小竪穴からは出土遺物が少なく時期決定にはいたらない。

7．出土した遺物　縄文土器４　土師器８　須恵器４　石鏃11　打製石斧31　石匙４　凹石２　石槍１　石錘１　磨製石斧３　鉄製品２　土器片石片３箱　縄文土器と打製石斧は第２号住居跡中層・下層からの出土が多く、投げ捨てによるものと思われる。土師器、須恵器は第１号住居跡カマド周辺からの出土である。



第４図　志平遺跡遺構全体図（１：80）

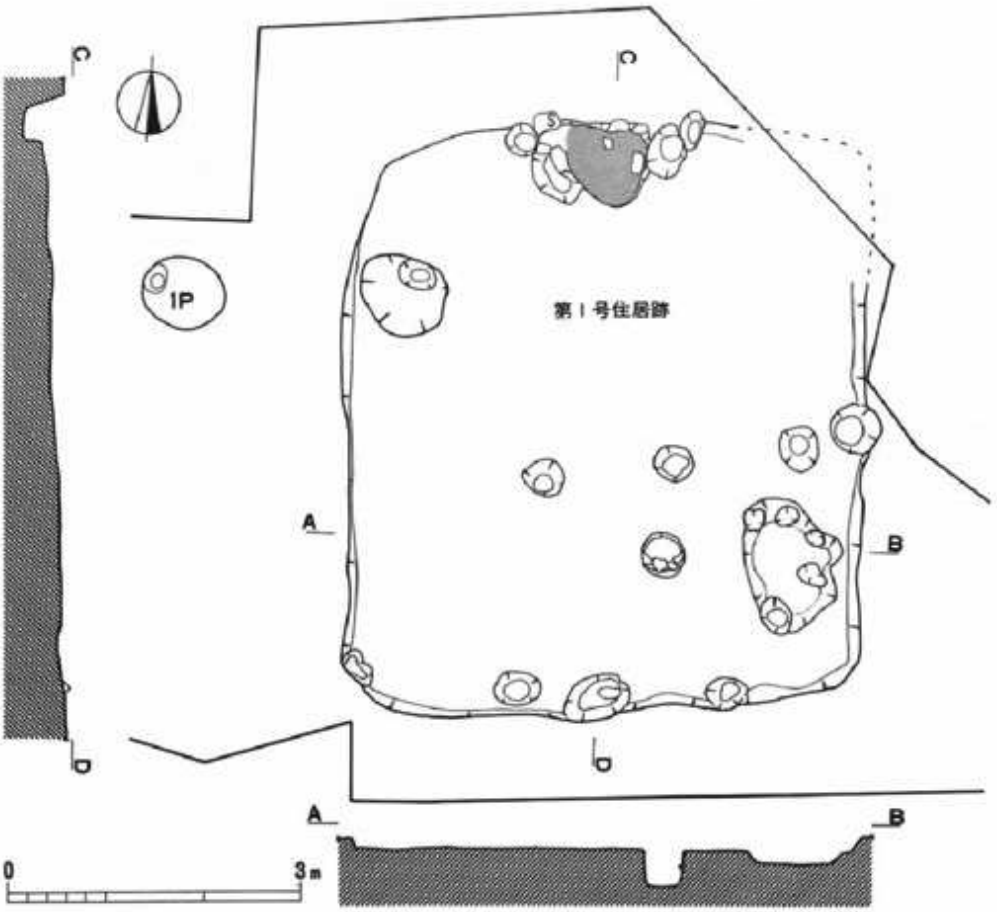
3．榎垣外遺跡柿垣外地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地字柿垣外2291―2
2．土地の所有者　　小松崇邦
3．発掘調査の期間　昭和63年４月21日～63年８月９日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　　１０１．５㎡
6．発見された遺構　平安時代住居跡　１棟
　　小竪穴　　２基

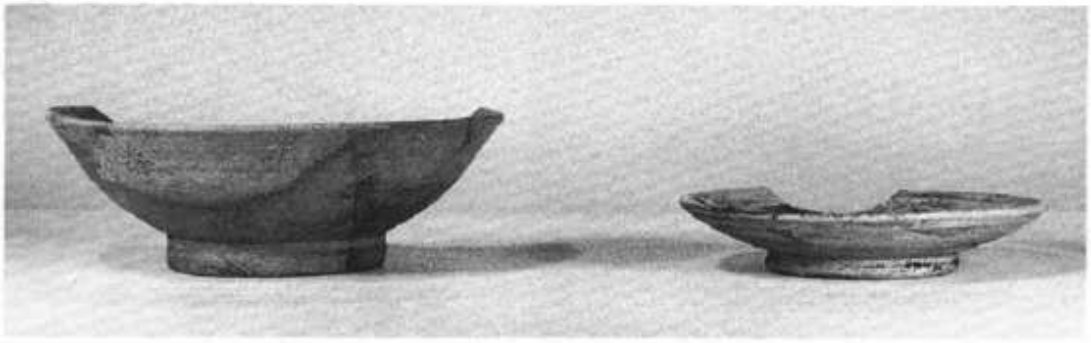
住居跡は、大小の石を含む黒色土を掘り込み、覆土は黒色土に拳大から、一辺が50cm前後の大きな石と炭を多量に含む非常に確認困難な土層であった。平面形態は、南北６ｍ×東西5.5mのややいびつな方形を呈す。床面は一部に堅い面を残し黒色土に黄褐色粒と砂粒子を含んでいる。カマドは北壁中央に位置するが、遺存状態は良くなく、崩壊していてその周辺に構築材の粘土や石組に使用されたと思われる石が散在している。それに混じってフイゴの破片が出土した。かろうじて火床上面に左右脇の石組と中央に支柱となる石が原位置を留めている。この住居は火災による焼失家屋であり、床上面には炭化材が多く散在し、中にはホゾ穴を残すようなものもあった。

第５図　第１号住居跡

第６図　加工痕跡のある炭化材



第７図　柿垣外地籍　第１号住居跡（１：80）



第8図　第1号住居跡出土の灰釉陶器碗と皿

7．出土した遺物　土師器7　須恵器1　灰釉陶器2　土錘6　フイゴ破片2　砥石3　青銅鏡2　鉄製紡錘車1　鉄製バックル2　鉄製海老錠1　その他鉄製品38　土器片・石片4箱

特筆すべき遺物に鉄製海老錠と二面の青銅鏡がある。いずれも、ほぼ床上面での出土である。「海老錠」の類例は多くあるが、平城宮跡から出土したものと同一であり、レントゲン写真によって施錠されて鍵は付いていない状態であることが確認された。厨子のような調度品の扉に付けられていたと考えられる。

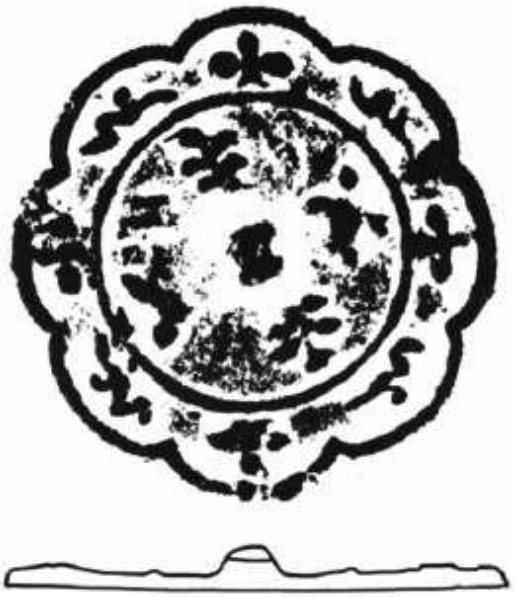
青銅鏡については、一方は「八花鏡」で完形品であり、文様も推定可能な逸品である。大きさは最大径6.25cm、縁端厚2.5mm、紐部厚5mm、文様のない部分の厚さ2.2mmの小品である。文様構成は唐式鏡的で、内区、外区に分けられ、内区は草花文と鳥文を交互に、外区は蝶（又は蜂文）と雲（又はつる草文）を交互に置く。文様はシャープさに欠けており、唐鏡を踏み返し作られた国産品と見られるが、八花鏡で小形という点では全国において発見例はない。他方は「方鏡」の断片（1/4）で、大きさは5.5×6.0cm、縁辺厚3.4mm、鏡貼厚1.9mmの超薄型である。形状は四隅が入角し唐鏡系に近い。類例は日光男体山に1点見られる。いずれも製作年代については伝世するのは不明であるが、伴出した灰釉陶器は、9C末～10C中頃におかれるので、そのあたりかそれ以前に推定されるようか。

その他散在する炭の中には扁平な板状の炭化材が折り重った状態で検出されて、それにアワ状の穀類と思われる炭化粒が混じっていた。これは米櫃のような木製品に納められた穀類が存在したともうけとめられる。このようにこの住居跡は、火災家屋であったがため

第9図　第1号住居跡炭化材と遺物出土状態

第10図　ホゾ穴のある炭化材

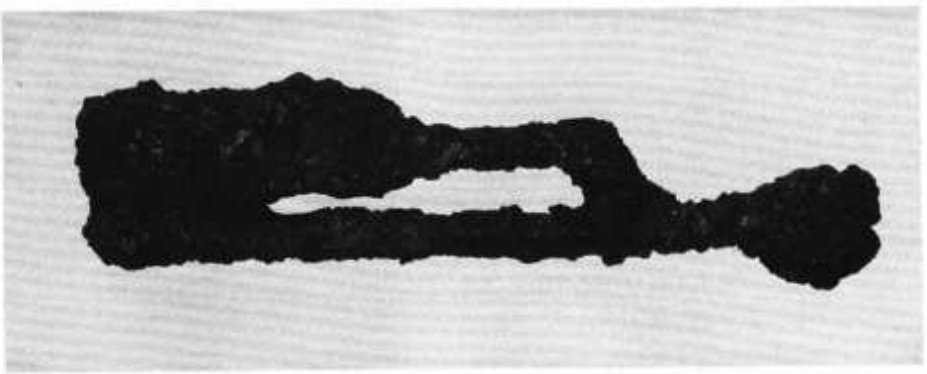
第11図　第1号住居跡出土八花鏡



第12図　八花鏡拓本・断面図

第13図　方鏡

第14図　鉄製バックル



第15図　鉄製海老錠

に非常に多くのバラエティーに富んだ遺物が出土し、多くの情報を提供する好資料であった。

なお、遺物に関する所見では、工楽善通氏・肥塚隆保氏・上原真人氏・巽淳一郎氏・寺崎保広氏・鬼頭清明氏（以上奈良国立埋蔵文化財研究所）、杉山洋氏（奈良飛鳥資料館）、久保智康氏（福井県立歴史博物館）をはじめ多くの諸氏より、御教示・御配慮を頂いた。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

4．榎垣外遺跡上の原地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地東堀小字上の原 2803―2

2．土地の所有者　松沢一男

3．発掘調査の期間　昭和63年5月14日～63年6月8日

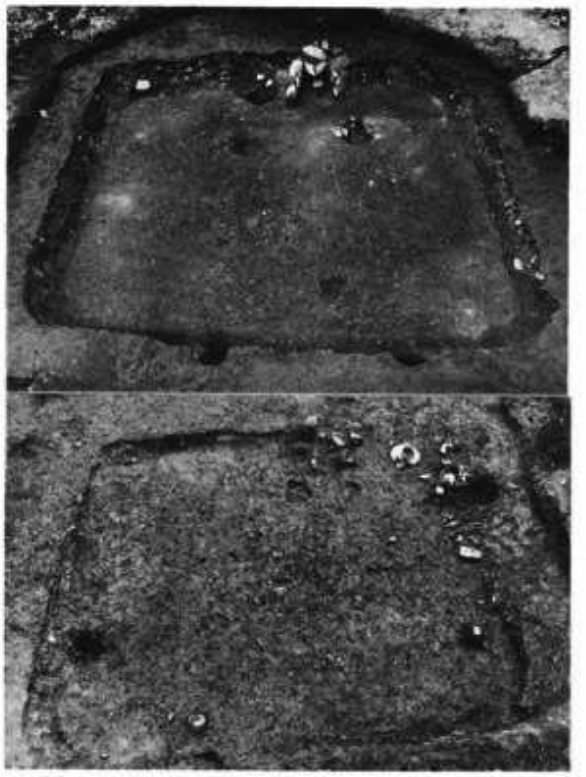
4．発掘調査の目的・原因　駐車場建設のため試掘

5．調査面積　89．2㎡

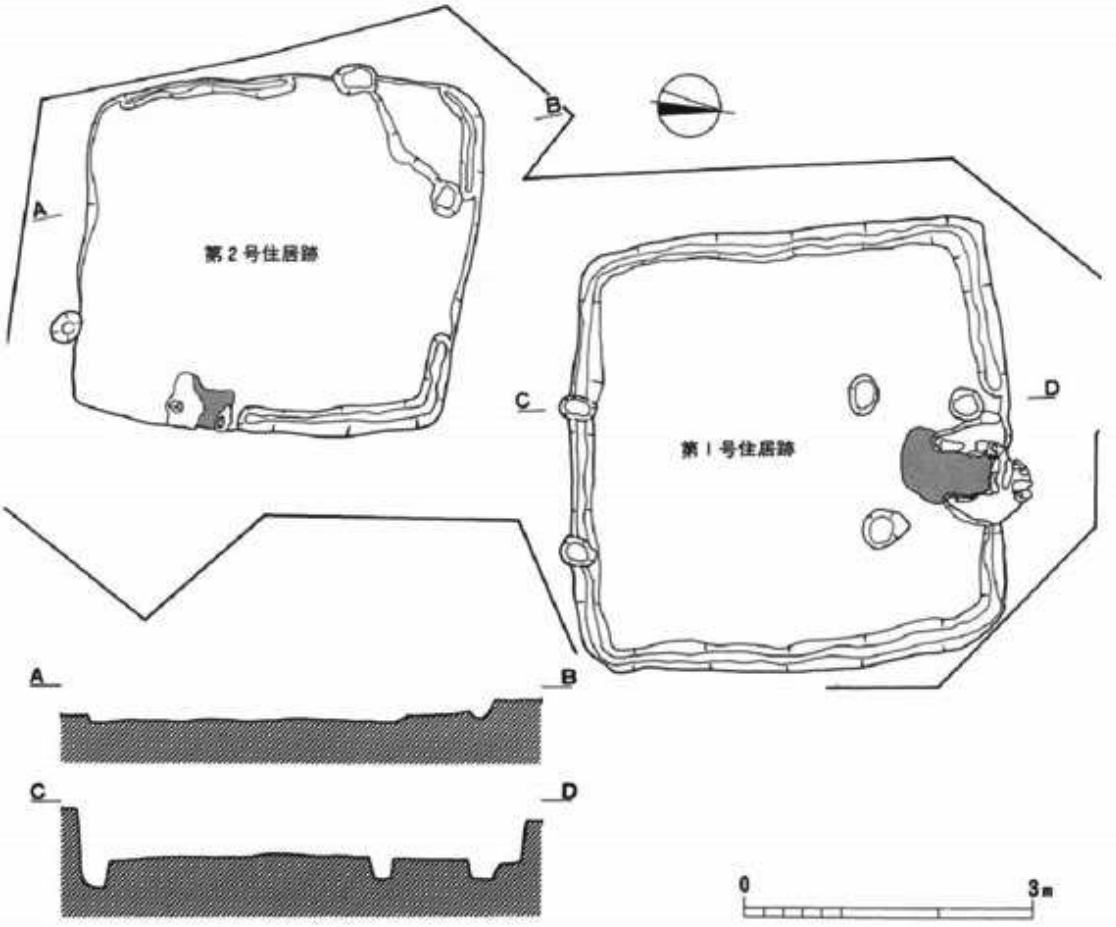
6．発見された遺構　平安時代中期住居跡2棟

第1号住居跡　ほぼ南北に沿って北側にカマドを配した南北4.5×東西4.5mの方形の住居跡である。壁は深い所で35cm程であり、カマドの残存は天井の崩落はあるものの比較的よい方であった。柱穴は住居跡中央よりやや北側に2本、南壁際に2本確認され、それぞれ20cm前後の深さを持つ。周溝は全周に巡る。

第2号住居跡　ほぼ南北に沿って造られ、4.0×3.7mの大きさの東側にカマドを配置した住居跡である。覆土は浅く、カマドの残存状態は火床面がわずかに残る程度である。北西隅には床面より一段高くなった堅い面があり、両脇に柱穴があることから出入口ではないかと推測される。



第16図　第1号住居跡（上）と第2号住居跡（下）



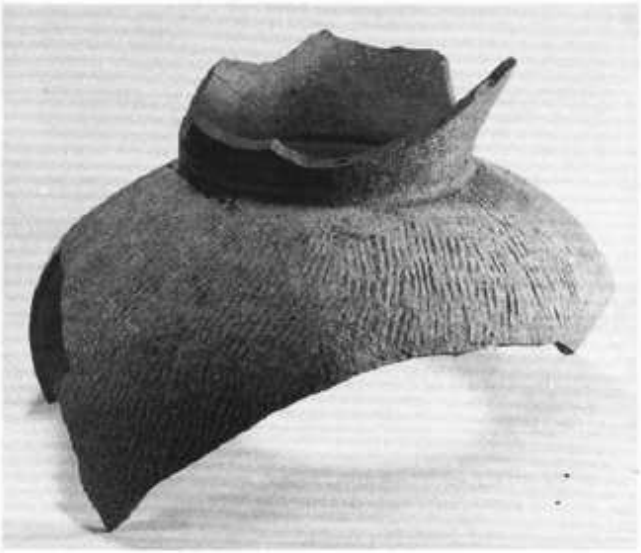
第17図　上の原地籍遺構全体図（1：80）

7．出土した遺物　土師器15　須恵器３　鉄製刀子4　砥石１　土器片石片３箱　土師器坏は第１号住居跡より10点、第２号住居跡より４点出土し、その中の２点は「＋」の墨書土器であり、墨の上をさらに刻書している。

第１号住居跡からは土師器甕がカマド脇より出土しているが他の遺物は覆土の中層から出土したものが多い。

須恵器壺、甕は第２号住カマド脇より大型の破片や坏と共にまとまって出土した。

第18図　第２号住居跡カマド付近



第19図　第２号住居跡出土の須恵器甕

第20図　第２号住居跡出土の須恵壺

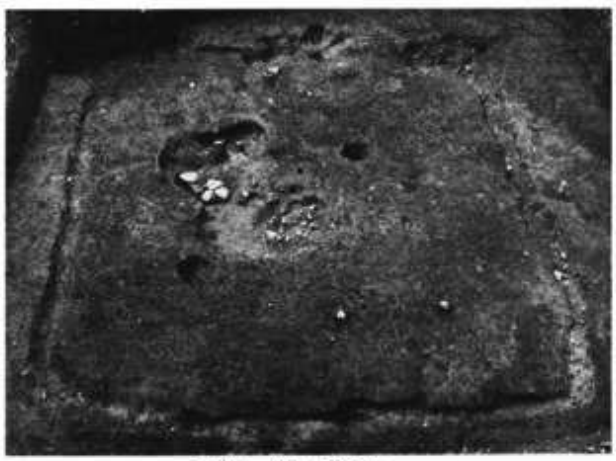
第21図　全体写真

5．榎垣外遺跡金山東地籍

1．発掘調査の場所　岡谷市長地2883―2
2．土地の所有者　　高木昭好
3．発掘調査の期間　昭和63年6月7日～63年7月4日
4．発掘調査の目的・原因　工場建設のため試掘
5．調査面積　　１６６．７㎡
6．発見された遺構　奈良時代末期住居跡　５棟

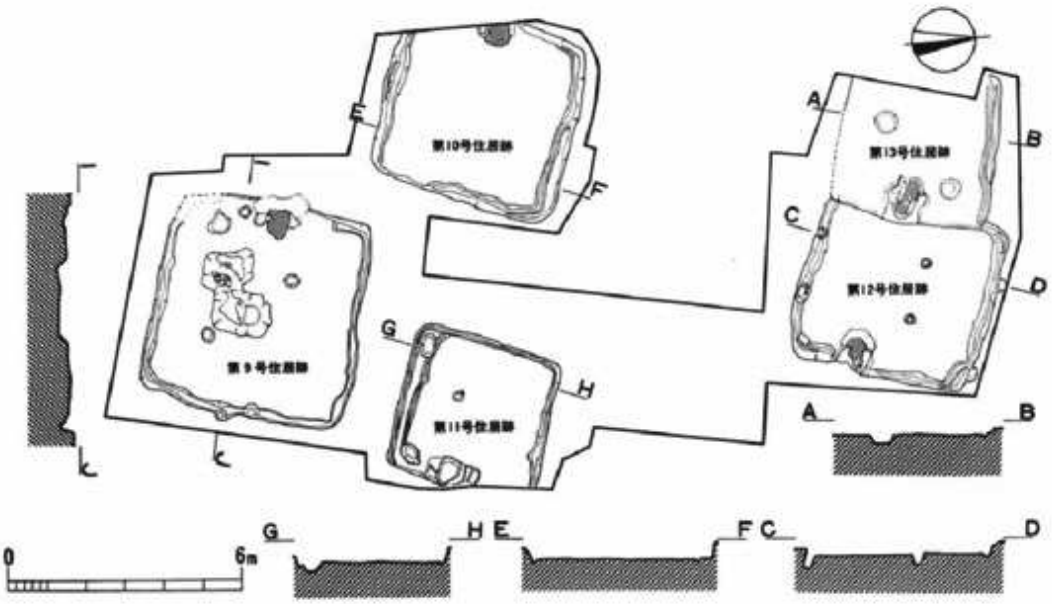
第22図　第９号住居跡出土の墨書土器

第９号住居跡　南北5.3×5.7mのやや大型の西側にカマドを配置した住居跡である。耕作のため壁の残りは悪く、カマドも火床面まで荒れていた。床は中央部ほど堅くなり柱穴は床面に２本、東壁際に２本確認できた。住居跡中央には、深さ20cmほどの不定形な穴があり、多くの土師器片や少量の焼土が入っていた。また、一部は直径20cm程の礫を基底部に含んでおり、灰捨て穴と柱穴が隣接していた様子である。住居跡北壁付近に古い火床面が検出され、カマドの移設を示していた。



第23図　第９号住居跡

第24図　第10号住居跡

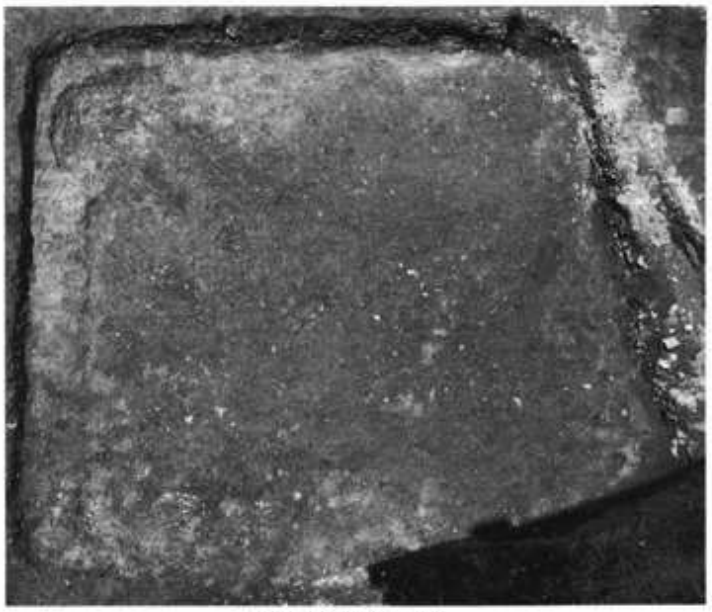


第25図　金山東地籍遺構全体図（１：200）

第10号住居跡　南北5.0×東西4.7mの西側にカマドを配置した住居跡である。壁は深い所で40cmほど残っているがカマドはほとんど原形を留めず、床面に広く焼土を散らしていた。耕作による破壊ではなく、住居が廃棄された時に人為的に壊されたものと思われる。床面には炭化物が多く検出された。

住居跡北壁側の周溝は壁の直下にはなく、やや住居内に入った所に掘られている。従って周溝と北壁の間に幅25cmのスペースが存在する。柱穴は床面では確認できなかった。

第11号住居跡　南北3.9×東西3.7mのほぼ南北に沿った東側にカマドを配置した住居跡である。周溝は東側にはなく、三方をコの字に囲んでいる。カマドは、耕作土が深いため火床面まで及んでおり、原形を残していない。床面は中央から南方向に貼ってあり、その下より旧周溝が検出され、南壁のみ拡張が確認された。



第26図　第11号住居跡

第12号住居跡　南北4.9×東西4.5mを測り、壁もカマドも遺存状況は良好であった。北壁は、砂礫層を掘り込んで作られている。

カマドの天井は一部崩れているものの、かなり良好な状態で残っていた。右袖先端部だけ粘土質の土ではなく、黒色土で固めており、この部分だけ一部破損した後修復して使用していたと思われる。柱穴は中央に２本、南壁際に２本、北壁に柱穴らしきものが２本検出された。

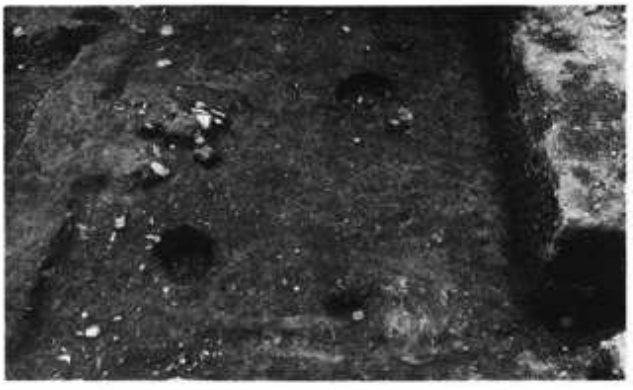
第27図　第12号住居跡

第13号住居跡　南北3.9×4.0mの東側にカマドを配置した住居跡で、カマドを含む東壁は、第12号住居跡の上に重複している。床は中央部が堅い。南壁は耕作によって削られており推定であるが周溝は東壁を除く三辺に巡ると思われる。カマドの残存は良好で一部天井の石も残っていた。

7．出土した遺物　土師器７（墨書土器１）　須恵器４　刀子３　鉄製紡錘車軸１　土器片石片３箱

各住居跡とも土師器・須恵器がまばらに出土している。刀子は第10号住居跡２本、第13号住居跡１本、鉄製紡錘車軸は第11号住居跡より出土している。墨書土器は第９号住居跡より検出された。

第28図　第13号住居跡出土の土師器皿



第29図　第13号住居跡

6．榎垣外遺跡（山道端地籍）

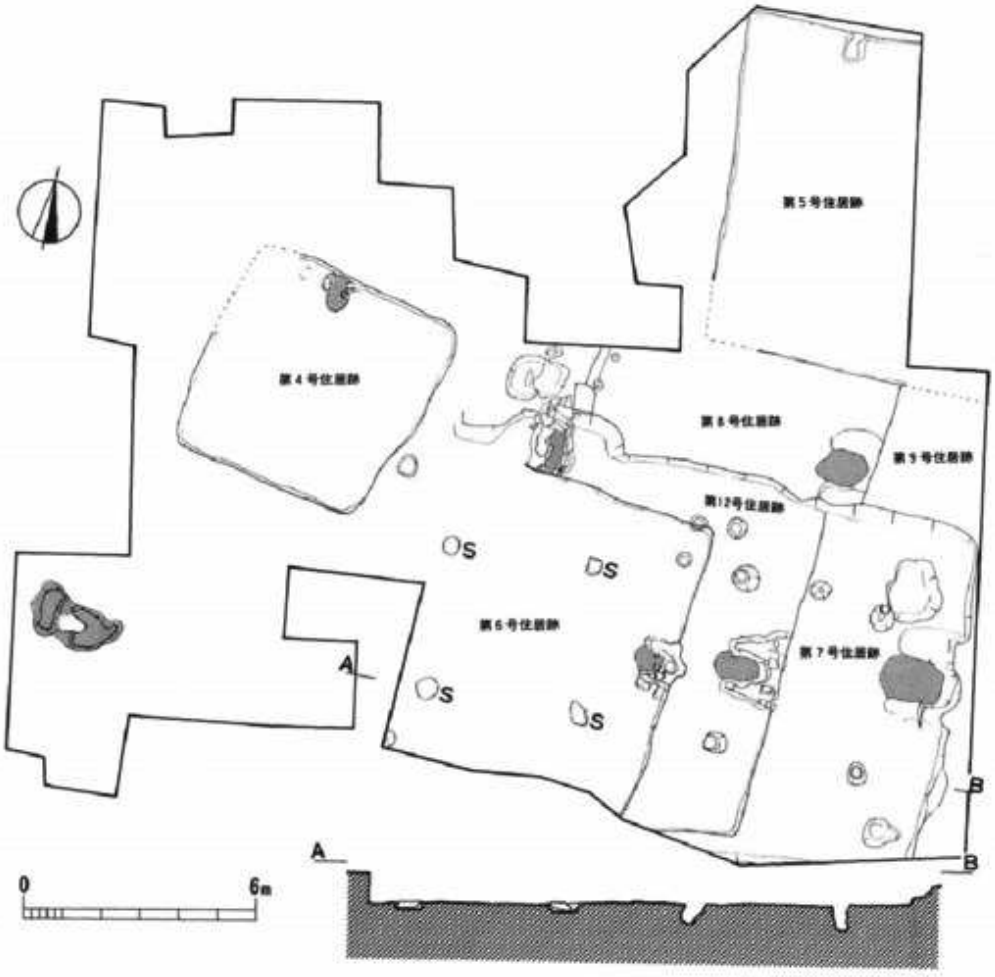
1．発掘調査の場所　岡谷市長地字山道端2349—1
　　2349—8　2349—9
2．土地の所有者　　八幡益晴
3．発掘調査の期間　昭和63年6月28日～63年9月30日
4．発掘調査の目的・原因　住宅建設
5．調査面積　　３５２．４㎡
6．発見された遺構　奈良平安時代住居跡　７棟
　　特殊遺構　　１基

第4号住居跡　南北5.5×東西5.8mの北側にカマドを配置した方形の住居跡である。柱穴、周溝はなく、カマドの残存状態もあまり良くなかったが周辺からの遺物の出土は多かった。第5号住居跡は、黒色土中に床面らしい堅緻な面が検出されたが、覆土との違いが明確でなかったため、正確な大きさがわからなかった。

第6号住居跡　南北約8.0×東西約9.0mの大きさで西側にカマドを配置した礎石のある住居跡である。カマドの残存状態は良好であり、すぐ左脇から墨書土器「〰」が横一列に並び重なって、棚から落ちた状態のまま出土した。

第30図　第4号住居跡

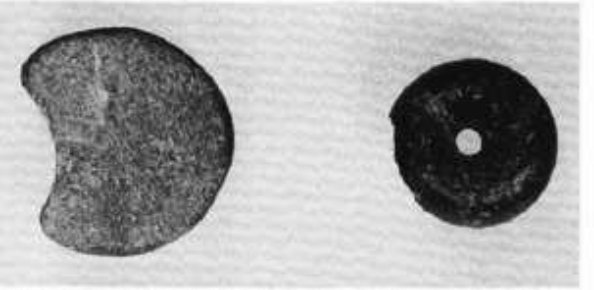
第31図　第7・12・6号住居跡



第32図　山道端地籍遺構全体図（1：200）

第７号住居跡　南北8.0×東西10.0mを測る大型の住居跡である。カマドの残存状態は、石組を抜き取られているため良くないが、袖幅250cm奥行140cmの大型のカマドである。カマド右側には、多くの須恵器坏・蓋などが出土している。

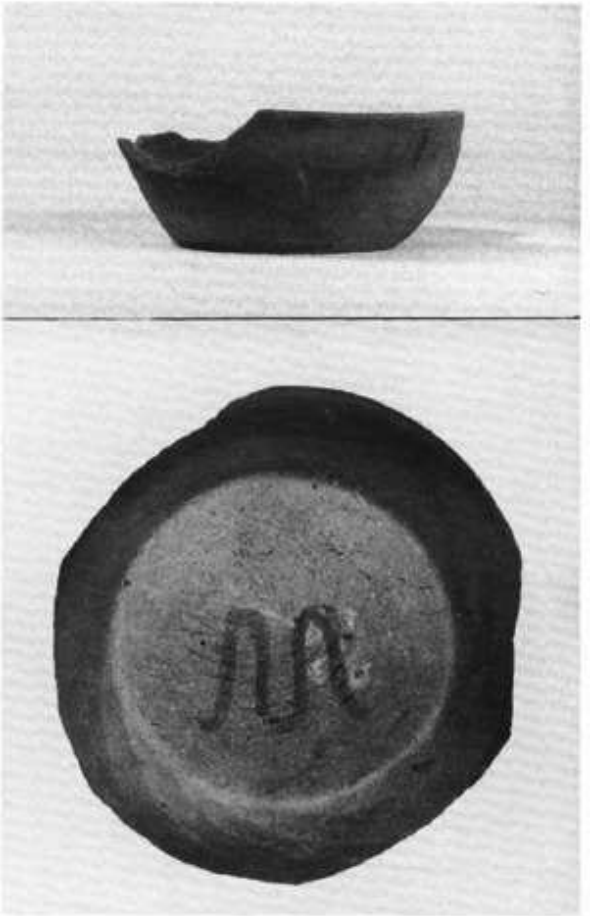
第８号住居跡　本跡は拡張もしくは、建て直しにより第９号住居跡となる。そのため、８号住居カマド跡は第９号住居の床下より確認された。第９号住居跡のカマ

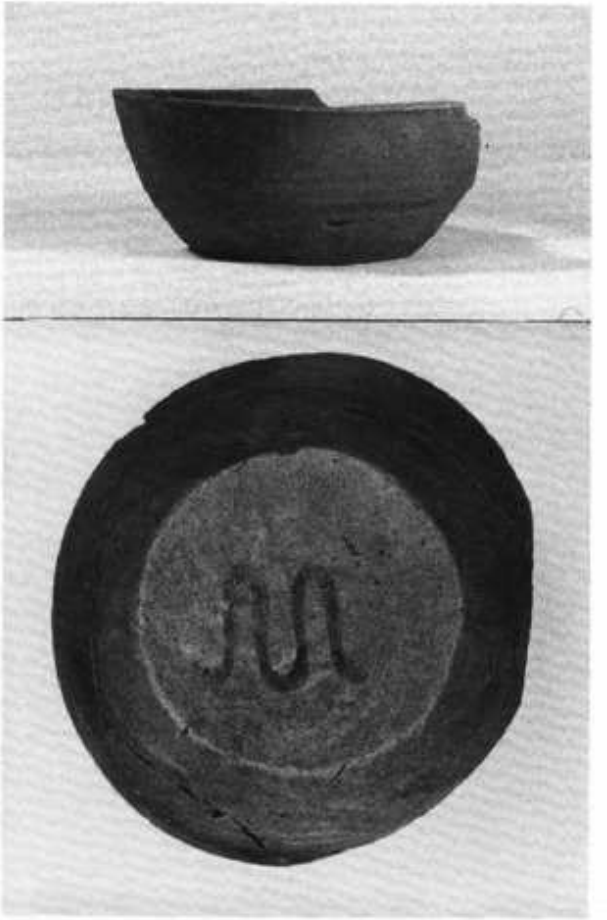


第33図　第８号住居跡出土の石製紡錘車（右）と砥石？（左）

第34図　第12号住居跡のカマド石組

第35図　第６号住居跡の墨書土器出土状態





第36図　第６号住居跡出土の墨書土器（坏底部裏面）

ドは、さらに東側に寄り調査区外になってしまっている。

第12号住居跡　南北10.0×東西11.0mを測る大型の住居跡である。西側に袖幅200cm×奥行140cmのカマドを配置し、さらに北側に張り出し部を作り、そこに袖幅110cm奥行260cmの細長いカマドを設置してある。このカマドは一部第6号住居跡に切られているものの火床面は正確に検出できた。

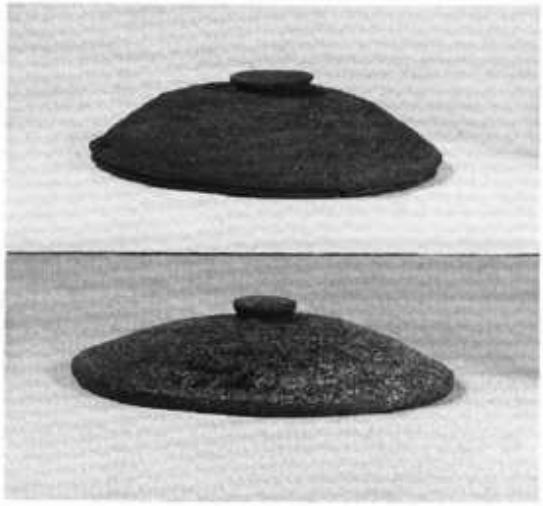
第37図　第7号住居跡の遺物出土状態（カマドの南側）

特殊遺構　焼土の固まりが16cmの厚さで焼けており、中央にピットが検出されたが、どのような性格の遺構か明らかではない。

7．出土した遺物　土師器19　須恵器46　銅製品2　短刀1　砥石2　土錘7　凹石1　石皿1　墨書土器．破片を含む「〜」の土師器15片、須恵器9片その他不明墨書若干。

墨書土器のそのほとんどが第6号住居跡より出土している。須恵器は第7号住居跡からの出土が著しい。

第38図　第7号住居跡出土の短刀



第39図　第7号住居跡出土の須恵器蓋

第40図　第9号住居跡出土の灰釉陶器壺

第41図　第4号住居跡出土の円面硯

7．清水田遺跡

1．発掘調査の場所　岡谷市長地中村小字中村4303—1
4303—3　4303—4
小字清水田4302—2　4302—3
4302—4　4301—3　4300—3

2．土地の所有者　山田　中　山田直由

3．発掘調査の期間　昭和63年9月28日～63年11月1日

4．発掘調査の目的・原因　住宅建設

5．調査面積　１２７㎡

6．発見された遺構　縄文時代中期初頭住居跡　5棟
平安時代中期住居跡　2棟
小竪穴　3基

第1号住居跡　耕作によってほとんど破壊されていたが、わずかな火床痕跡と部分的な床面が残っておりその床直上に刻書土器「＋」が出土した。

第2号住居跡　ほぼ南北に沿った住居跡で、南北3.5×東西3.0mを測る。東側にカマドを配置している。床は中央部ほど堅くタタキ締められている。

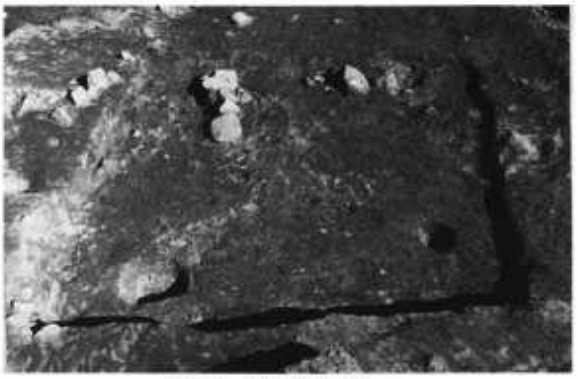
第3・4・5・6・7号住居跡　4回の建て直しが認められる縄文時代中期初頭の住居跡である。上から下へスライドして、5住→3住→6住→7住→4住の順と思われる。第5号住居を除く4棟の住居跡はどれも堅い床面を持つ。

小竪穴　1基は弥生時代の土壙墓であり、大型の甕1個体が出土した。その他2基は時期不明である。

7．出土した遺物　縄文土器3　弥生土器1　土師器3（刻書土器1）　須恵器2　石鏃3　打製石斧4　凹石10　石棒1　磨石類5　石皿1　刀子1　玉類1　砥石1　土器片石片3箱

縄文土器、石器類は大部分は3・4号住居跡覆土から出土した。どちらの住居跡も大型の土器片が多く、また、直径20cmほどの礫と混じり合っていて、完形に復原されるものは極めて少ない。

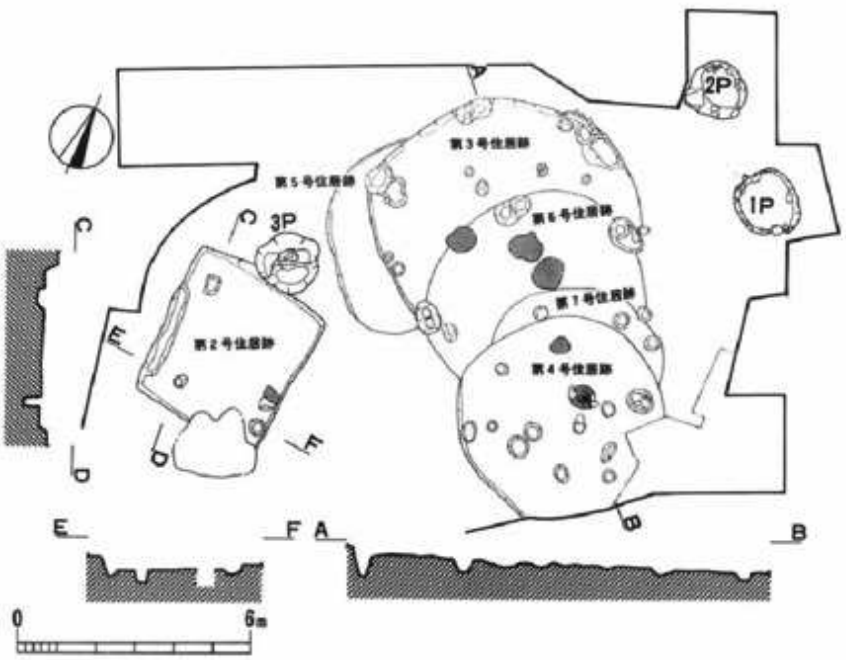
弥生土器は、土壙墓と思われる小竪穴より出土している。第1号住居跡の出土遺物は少なく、完形に近いものは部分的な床面より検出した刻書土器だけである。第2号住居跡には、カマド付近より土師器、須恵器が出土したほか、刀子が1点検出されている。



第42図　第2号住居跡

第43図　遺構全体写真

第44図　小竪穴No.1



第45図　清水田遺跡遺構全体図（1：200）